

目次

表紙題字 柏俣昌平

口絵
序
凡例

第一章 玉川のあけぼの

第一節 最古の住人たち

一 ローム層(赤土)に潜む文化

人類の誕生 火山活動とローム層

二 篩新田遺跡の石器

玉川村の地形と地質 篩新田遺跡のナイフ形石器

第二節 狩猟・漁撈・採集の生活

一 縄文時代のはじまり

石器の発明と弓矢の使用 土器型式と時期区分 最古の土器群

二 玉川最古の縄文人たち

縄文早期の日野原遺跡 早期前半の土器群 条痕文土器群の登場と八盃沢遺跡・西山遺跡 早期後半の土器群

三 気候の温暖化と定住生活

気候の温暖化と定住生活 縄文前期の土器群 玉川村とその周辺

縄文前期遺跡の状況

四 玉川縄文人の活躍

玉川・明覚遺跡群 自然への適応 豊かさを祈って 中期の

土器群

ページ

一

三

三

七

一一

一一

一五

二三

三二

五	姿を消した玉川縄文人	四五
	気候の寒冷化と人口の減少	
	石遺構	
	後・晩期の土器群	
	後久保遺跡の土偶と中野原遺跡の敷	
	第三節 農業の始まり	
一	稲作の開始	五七
	弥生時代のはじまり	五七
	東日本への農耕技術伝播	
	環濠集落と高	
	地性集落	
二	弥生文化と生活の変化	六二
	池上ムラ	
	増大した集落	
	岩鼻式・吉ヶ谷式土器文化と玉川	
	第二章 古代政権と玉川	七一
一	第一節 古墳の築造と人々の生活	七三
	一 古墳の築造	七三
	古墳の築造	
	行司免遺跡の古墳跡	
二	古墳時代の集落	七九
	前記の集落	
	後期の集落	
	第二節 律令体制と玉川	八五
一	大化改新と地方制度	八五
	武蔵国の成立	
	武蔵国国府跡	
	国郡里制	
	条里制の施行	
	租・庸・調	
二	比企郡内の郷	九四
	比企郡四郷	
	過酷な農民の生活	
	寺院の建立	
	第三節 窯業の隆盛と玉川	九九

一 武蔵国の四大窯業地

九九

武蔵国の須恵器生産 武蔵国分寺瓦窯 末野窯跡郡 南比

企窯跡郡 東金子窯跡郡 南多摩窯跡郡 南比企窯跡郡生産

須恵器の供給ルート

二 玉川の窯業遺跡

一一〇

亀ノ原窯跡郡とその出土遺物 日野原一号窯跡とその出土遺物

篩新田遺跡の灰原と出土遺物

三 玉川の窯業

一二九

玉川台地上の窯業関連集落 原遺跡一号住居跡とその出土遺物

伊勢ノ台遺跡の住居跡と出土遺物 篩新田遺跡の住居跡と遺物

第四節 古代末期の玉川

一四九

一 地方政治の乱れ

一四九

荘園の形成 武蔵国の治安悪化 平将門の乱

二 武士の登場

一五四

武蔵七党 源氏の東国進出 大蔵館の戦い 保元・平治の乱

と武蔵の武士団

第三章 中世の玉川村

一六一

第一節 鎌倉・南北朝・室町期

一六三

一 この期の概観

一六三

鎌倉幕府と御家人 比企氏 畠山氏 その他の御家人 比

企氏・畠山氏の滅亡と比企地方 鎌倉府 足利尊氏の制覇

関東公方足利基氏 南北朝期玉川の周辺 鎌倉府の滅亡 上

田氏の登場、そのルーツ 相模の上田氏 比企の上田氏 上
田氏の形態

二 大河原庄と玉川

一七七

(一) 大河原郷と大河原庄

莊園と国衙領 大河原郷大河原庄 九条家領と大河原庄 慈
光寺領 玉川村と大河原庄

(二) 大河原氏と外秩父

大河原郷と丹党・児玉党 丹党児玉党の確執 その後の大河原
氏と玉川

(三) 外秩父と玉川

外秩父と山の辺の道 玉川村の位置

三 伝説と信仰の世界

一九二

(一) 斉藤実盛の

実盛の死 実盛の供養 保元寺の追墓 円通寺の実盛の墓
実盛と農民信仰

(二) 曾我十郎祐成の供養塔

曾我兄弟の伝説 龍福寺の古碑 大磯の虎 虎の善光寺参り
と玉川 玉川の浄土信仰 曾我兄弟と御霊信仰 虎が石と龍
福寺古碑 無口の蛭伝説

(三) 玉川村の神社と信仰

玉川村の神社 自然崇拜と御霊信仰 熊野信仰 春日信仰
五明円通寺と日影真光寺をめぐる

二一六

五明の地名 円通寺の沿革 円通寺の銅像阿弥陀如来立像

阿弥陀如来像の作られたころ	阿弥陀立像の寄進者	高瀬弾正	
高広	大工実吉	真光寺と慈光寺	五明・日影と慈光寺
藤原盛吉と龍福寺・春日神社			二三八

龍福寺碑文	龍福寺の開創と阿弥陀如来坐像	龍福寺の変遷	
春日神社の創建	信仰の中心地	春日神社の隆盛	藤原盛吉
の出自	波田野氏と藤原盛吉	藤原盛吉の館跡	館の堀跡の
発掘調査	館の存在と館の終焉		
六	玉川氏を名乗る人びと		二四九

玉川頼曇と玉川三郎次郎	頼曇と報恩寺	玉川小太郎	
七	玉川村の板碑		二五六

板碑の調査	板碑の地域と年代	造立の推移	造立の目的
仏をたたえる	板碑の主尊	別時念仏板碑	十三仏板碑につ
いて	玉川村の十三仏板碑		
八	玉川村内出土の古瓦と蔵骨器		二七九

第二節 戦国期

一	戦国大名北条氏		二八九
---	---------	--	-----

北条早雲	北条氏綱と上杉氏	北条氏の関東支配	松山領の	
形成	北条氏の滅亡	北条氏の貢租	六斎市	職人支配
二	東光寺と松山城主上田氏		二九九	

東光寺	開基の上田氏	他国衆の上田氏	松山城主の上田氏
開山日正	上田長則と東光寺	上田憲定と東光寺	日傭上人

と東光寺

三 玉川村の寺院

三一七

四 小倉城と遠山氏

三二〇

小倉城 遠山氏の系譜 遠山丹波守と左衛門尉 遠山寺と遠

山氏 小倉城主遠山氏 小倉城の構造とはたらき 江戸時代

と小倉城主 遠山寺の開山 小倉城と遠山寺 小倉城の創始

小倉城の終末

五 玉川郷と松山城主上田氏

三四二

玉川郷について 玉川郷の分村 松山領の中の玉川郷 松山

領と山ノ根 御城付御知行 御陣屋森兵庫 柴宿と軍勢の侵

入

六 在地の武士と人びとの生活

三五五

在地の中世武士 玉川郷の武士（新井兵庫 小沢肥前 神

山和泉守入道 木呂子氏 高山氏 五明氏 沢田五右衛門

杉田助左衛門 田中氏 長島氏 堀口右衛門貞欽 町田氏

三上山城守 縦沢三右衛門） 結衆板碑 民間信仰板碑 集

团的造立の板碑

第四章 近世の玉川

三七三

第一節 徳川氏の関東入国と玉川

三七三

(一) 家康の関東支配

近世への胎動 徳川氏の関東入封 北武蔵の知行割 蔵入

地の設定と大久保長安

(二) 玉川陣屋の支配

玉川陣屋の成立と初期の代官 玉川領の形成 玉川陣屋の位
置と性格 歴代の代官 市の消長と年貢

第二節 幕府の宗教政策と村落の神社

一 村域の寺院

(一) 村域の寺院と本末制度

村域の寺院 寺院の本末制度 本山の貫首となった日棟

(二) 朱印地と除地

朱印寺院領の寄進 除地の認可

(三) 村落寺院と檀家制度

檀家制度 寺檀関係をめぐめる問題

(四) 檀家制度と祭道公事

祭道公事 延享元年の争論

(五) 寺院の経営と檀家の役割

代官陣屋と寺院 寺院経営を支えた農民

(六) 檀家制度をめぐめる争論

明和三年の新住職入院出入 文化十四年の居士・大姉号出入

文政六年の位牌争論

二 村域の神社

(一) 村域の神社と管理

村域の神社 神社の管理

(二) 神社をめぐめる争論

延享二年の裁許請書 文化十二年の祭礼出入 安政三年の風損木出入

四一七
四一七

四四四

第三節 近世村落の成立と農民の暮らし

一 玉川の領主と巡見使の通行

(一) 玉川の領主たち

玉川郷と内藤氏 玉川郷と安藤氏 田黒村と金田氏 日影村
の支配変遷 五明村の支配変遷 御三卿清水家の設置と所領変遷

(二) 巡見使の通行

玉川に伝わる幕府巡見使の資料 天保の巡見使 巡見使のみた村々

二 農民の暮らし

(一) 検地と農民

検地と石高制 玉川村の検地 慶長二年日影村検地 検地帳
にみる慶長期の日影村 主水と分付百姓 寛文八年玉川郷検地

(二) さまざまな負担

年貢と農民 日影村にみる年貢上納の変化 年貢上納をめぐる
村々の訴願運動 年貢米の江戸廻送 紙舟役 江戸城正月
飾り用の竹の上納 御用炭の運搬 助郷役

(三) 村の秩序と農民の暮らし

領主の法令と村の秩序 村役人と小百姓 五人組と寺請制

(四) 秣場をめぐる争論と新田開発

村切りと村境 村境出入 近世前期の山論とその解決 秣場
と新田開発

第四節 産業の発達と交通

(一) 耕地の拡大と農業の発展

耕地の拡大と用水 農業の発展

四五二
四五二

四六五

五一四

(二) 農間余業の増大

農間稼 紙漉 織物 醸造 水車稼

(三) 交通と輸送

陸上交通 江戸への輸送と筏流し

第五節 農村の変貌と動揺

一 領主財政の窮乏と村の変貌

(一) 領主財政の窮乏

領主財政と年貢賦課の動向 旗本財政の窮乏と村落 旗本内藤氏の財政

(二) 農村の変貌と村方騒動

変貌する農村 村方騒動と村落

(三) 欽背の災害と飢餓

玉川村の地理的条件と災害 災害・飢餓の記録 社倉

二 文政改革と玉川郷組合

(一) 玉川郷組合の成立

改革前の状況 組合村の設置 小川村組合の成立と構造 玉

川郷組合の成立

(二) 玉川郷組合の機能

警察的機能 囚人預り 風俗の取締り 農間余業の調査・統

制 村々の負担 その他の組合

三 天保期の村々

(一) 天保の飢餓

天保の飢餓 玉川村地域の状況

五四七

五四七

五六五

五八二

(二) 飢餓への対応

飢餓への対応 天保の改革

第六節 近世の庶民信仰と文化

一 講の流行と庶民信仰

五九〇
五九〇

(一) 講の流行と旅

講の流行 文久二年の奥州への旅

(二) 石仏等に見る庶民信仰

石仏等の概観 庚申等 馬頭観音 地藏と六地藏 廻国・

巡拝供養搭 二十に夜搭 読誦搭 弁財天 大黒天と不動

尊

二 寺子屋と俳諧の流行

六〇二

(一) 寺子屋の普及

寺子屋 日近 新井為直 小沢樵翁 堀口紫風 高山是

久 西山伯翁 高さか雅雄

(二) 俳諧の流行

俳諧の流行 俳額奉納と判者

第七節 動揺する村

六一九

(一) 増大する負担

ペリー来航以来の負担 和宮下向と助郷負担 川崎宿への助郷

軍役の負担

(二) 武州一揆と玉川

世直し一揆 生糸改所の設置 村域での打ちこわし

(三) 戊辰戦争下の玉川

出流山事件と銃隊取立 社倉貯穀の拝借事件 新政府軍への助郷

第五章 近代の玉川

第一節 明治初期の玉川

一 入間県から埼玉県へ

府藩県三治制と玉川村の領域 蕪山県への管轄換と寄場組合体制

戸籍法と戸籍区の設定 入間県の成立と大・小区制 区・戸長

制の変遷 村々の負担

二 戸長役場から連合戸長役場へ

三新法の制定 戸長役場の設置 町村会と町村財政 連合戸

長制の実施

三 地租改正と産業事情

地券の発行 地租改正法の交付 地租改正事業の開始 地位

等級の調査 地租改正の完了 地域産業の特色 玉川郷産馬

会社の設立

四 小学校の設置

学制の領布と小学校の設置 教育令の公布

五 この期の社会諸相

徴兵制の実施 明治初期の警察区画 神仏分離と神社の列格

社寺領の上知と寺院整理 玉川橋の新架 明治十五年の玉川大

火 玉川郵便局の開設

第二節 玉川村の成立と発展

一 町村制と玉川村の成立

六三七

六三九

六三九

六五五

六六三

六七九

六八八

七〇六

七〇六

町村制の実施	町村の大合併	町村制施行後の町村状況	村
役場位置の変遷	村長および村吏員	村会と区会	町村制の
改正	財政の状態	昭和の諸規程制定	玉川村選出の県会・
郡会議員			
二	警察・消防と衛生		七四三
玉川駐在所の設置	消防組の設置	種痘の普及と実施	伝染
病と防疫対策	トラホーム・花柳病の予防と寄生虫の駆除		
三	産業の発展		七五七
明治初期の水車	玉川村の水車稼業	明治以降の和紙製造	
明治以降の養蚕業	生糸と絹織物生産	農業の実態	堰と溜
池	村農会と産業組合	商工金融と商工会	
四	交通の発展		七九六
道路と橋梁	乗合馬車と乗合バス		
五	教育と文化の発展		八〇八
玉川尋常高等小学校の開校	日進塾と日影の私立尋常小学校		
授業料の廃止と就学率の上昇	玉川小学校の校地拡張と分校の設		
置	実業補習学校から青年学校へ	神社の統合	神道丸山教
会所の設立			
第三節	戦時体制下の玉川		八四三
一	軍事態勢の強化		八四三
国民精神総動員運動から大政翼賛運動へ	防空体制と徴兵の強化		
食糧の増産と衣食の配給生活			
二	戦時体制下の教育		八六五

第六章 現代の玉川

第一節 戦後の復興と玉川

一 戦後の玉川の様子

二 農地改革の実施と開拓事業の推進

(一) 農地改革の実施

農地改革の政策の動向 玉川村の農地改革の状況

(二) 農地開拓事業の推進

開拓実施の背景 玉川村の開拓事業

三 教育の民主化

教育の大変革 玉川小学校 玉川中学校の開校 小川高校玉

川分校の成立 県立玉川工業高校の成立

四 消防体制の整備

警防団から消防団へ 消防施設の整備など

五 町村合併の動きと経過

合併推進の背景 合併促進の動き

第二節 高度成長と玉川

一 高度成長と玉川の変化

人口の動向と住宅の急増 産業別就業状況 工場の進出 名

誉村民条令の制定 名誉村民の推挙

二 社会資本の充実

公共施設の建設	道路・橋梁の整備	上水道の整備と充実
玉川村保育所の設立	公民館等各種施設の充実	スポーツ施設の充実
教育施設の充実	玉川工業高校の学科転換	鉄道の 変遷
バス路線の変遷	郵便業務の変遷	電話・通信の変遷
河川の整備と砂防事業の推進	雀川砂防ダムの完成	
三 行財政と村勢の推移		九四五
乏しい村財政と税制改革	高度経済成長と行財政状況の変化	
所得の豊かさと社会生活の変化	高度経済成長と村内経済の推移	
植生の変化		
第三節 二十一世紀をめざして		九五二
一 第二次玉川総合振興計画		九五二
基本構想	基本計画	
二 村政施行百周年行事		九五四
はばたけ未来へ	記念講演会	記念式典を盛大に挙行